

故郷の新聞を読んで

.....

橋本 昇

(谷津作出身/千葉支部)

「おのまち夏まつり」を楽しんだ翌日、小野町ふるさと文化の館(図書館)で『福島民報』縮刷版(2011年3月・4月)から東日本大震災の紙面をたくさんコピーしてもらった。

3月12日は「震度6強、大津波」「南相馬で1,800世帯壊滅状態」など巨大地震と大津波の記事が中心だが、13日には「福島第一原発で爆発 放射性物質拡散か」となり、以後、この福島第一原子力発電所の事故とその影響が記事の中心となって続いていく。

読んでいて思い出したことがある。中学生の頃「猪苗代湖の水は一滴も福島県が手を付けることはできない。東京電力のものだから」と聞いた。今はどうか分からないが、原発に関して「電気は関東に、放射能は福島に」となってしまったことは事実だ。そして多くの人々が緊急の避難に追い込まれ、分断家族がたくさん生まれて

しまった。農作物は放射性物質を含んで出荷禁止や作付け禁止まで出た。千葉県に住み、福島の大震災の恩恵を受けている者として申し訳なく思う。

いったん事故が起こると何世代から何十世代にもわたって決定的な打撃を広げる原子力発電はやめるべきだと私は思う。それに、事故が起こらなくても、原子力発電では核分裂後の放射性物質はたまり続ける。増え続けるこれらを、日本全国で身近なところ(現在は全国の原子炉建屋内の水槽)に保管している。無害化するには数十万年が必要だという。水槽の水が無くなれば同じ事故は起こる。大地震も再来の可能性がある。やがては現在の除染問題どころではなくなるはずだ。

もう一つ、飯豊から浮金に上る長い坂は「発電所の坂」と呼ばれ、その脇の急流に、昔、水力発電所があったらしいことを思い出し

た。最近、風力発電・太陽光発電・小規模水力発電などが急速に普及してきた。今後は、さまざまな発電方法を組み合わせて小規模電力供給区域をたくさんつくるのが良いのではないかと考える。一つは小規模で電力の安定供給には向かないといわれるが、小規模発電所の絶対量を増やし、蓄電設備を開発し、小規模電力供給区域の緊密なネットワークをつくっていくれば、安定供給につながるはずだ。原子力発電所を除いた現在の電力供給網に小規模電力供給区域を組み合わせて新たな電力供給体制を再編成していくのだ。

皆さんはどう考えるでしょうか。

